

群小詩人列伝-ロセッティ家の人々
父ガブリエーレの巻

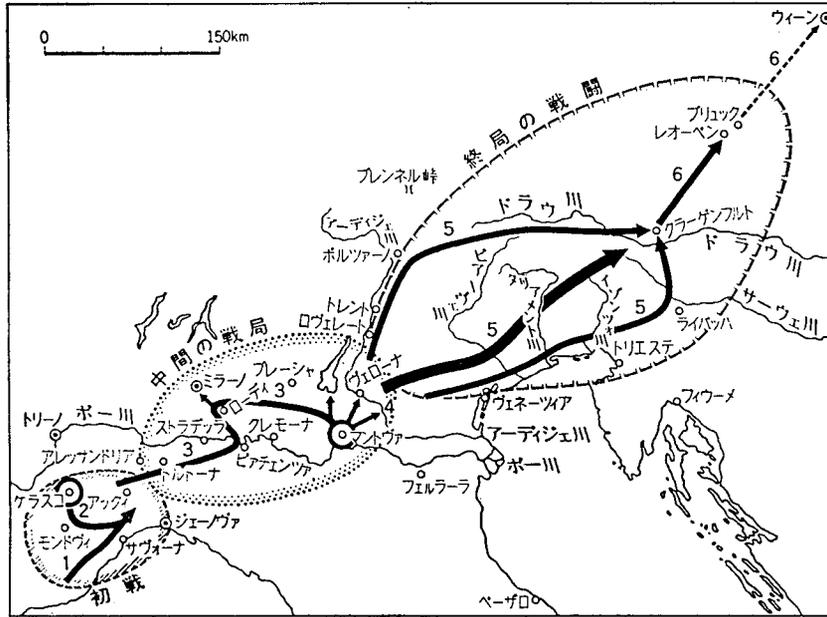
メタデータ	言語: jpn 出版者: 明治大学人文科学研究所 公開日: 2012-05-16 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 辻, 昌宏 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/11886

群小詩人列伝—ロセッティ家の人々
父ガブリエーレの巻

辻 昌 宏



息子D. G. ロセッティによるガブリエーレ・ロセッティの肖像画 (1853)



ナポレオンのイタリア侵略(1796 - 97年)



18世紀中ごろのイタリア

群小詩人列伝—ロセッティ家の人々 父ガブリエーレの巻

辻 昌 宏

序

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティとクリスティーナ・ロセッティの母は、晩年70代に、「私はいつも知性に対する情熱をもっていました。夫が、そして子供達も知的に優れること、が私の願いでした。私の願いは叶いました。が、今ではもう少し家庭に知性が欠けていても、もう少し常識が入り込んでいたら、と思います。」と述懐している。つまりロセッティ家の人々は知が勝ってはいるが、常識に欠けていた、という訳だ。極端にいえば、変人・奇人の集まりだったとも言えよう。では、誰が、どんなふうに変っているのか。また、変人というのも、1800年生まれのイギリスの老婦人が観た変人と現代の日本人たる我々が判断する場合ではおのずから異なる点がでてこよう。小池滋氏の指摘のように、ヴィクトリア朝(1837—1901)と現代日本には様々な共通点がある、経済大国になった、教育水準が高まった、レジャーが盛んになる、大都市の過密状態、公害、等々(小池滋著『島国の世紀—ヴィクトリア朝英国と日本』文藝春秋、昭和62年)。が、一方で当然のことながら、時代も国も異なるのだから違いも大きい(たとえば虎岩正純著『イギリスの中から』研究社、森嶋通夫著『イギリスと日本』岩波新書をみても、或いはみなくてもそんなことは常識である)。違いがあるのは当たり前としても、どこがどう違うという細部の違いには、必然性がない。つまり、知らなくて当然ともいえる。ここでは、僕は、ヴィクトリア朝英国と現代日本の特性を比較しようなどという大それたことを企てようというのではない。あくまで、ロセッティ兄妹を中心にしたロセッティ家の人々に焦点をあてる。そのための前提条件=背景として我々の見落としがちで当時の常識をおさえ、その上で、彼等の当時に於ける特殊性、そしてその特殊性が彼等の作品にどう結びついたか、つかなかったかを探り、描いてみたい。

I

ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティとクリスティーナ・ロセッティの父、ガブリエーレ・ロセッティは1820年代にナポリからロンドンに亡命した。何故、亡命する必要があったのだろうか、というのが僕の出発点である。

ここに *Gabriele Rossetti—A Versified Autobiography* (Sands & Co, 1901) という本がある。即ち、ガブリエーレが詩の形で書いた自叙伝である。原文はイタリア語だが、息子のウィリアム・マイケルが英訳し、背景となる事情について筆を加えている。一気に訳文を載せるのではなく、

適宜区切りながらその部分についてウィリアムが説明するというサンドウィッチ形式を取っている。

それによると、ガブリエーレは1783年2月28日生まれ。生地はイタリアのヴァスト。ヴァストというのはナポリの北150キロ、アドリア海沿岸の町でアペニン山脈を間に挟んでナポリとは対象的な位置にある。父はニコラ・ロセッティ、母はフランチェスカ・ピエトロコーラ。三人の兄がおり、アンドレア、アントニオ、ドメニコというが、アンドレアは説教が上手いので町で第一の教会 the Collegiate Church of St Mary の Canon になった。Collegiate Church というのは司教のいない教会で、聖堂参事会 (chapter) が運営しており、その聖堂参事会員が canon である。あとの二人の兄達も詩才に恵まれていたという。他に三人の姉妹がいた。話をもとに戻すと、ガブリエーレの父ニコラは鍛冶屋兼錠前師であり、母は靴職人の娘であった。ちなみに、ウィリアムが父ガブリエーレから何度も聞かされたところによると、ロセッティ家のもともとの姓はデラ・ガルディアであったという。デラ・ガルディア家の赤ん坊が赤毛または赤っぽい毛をしていたので、イタリア人の例に洩れずあだなを付けるのが好きなヴァストの人々がロセッティ = the Little Reds と呼びそれが正式名になってしまったのだという。ニコラの晩年は悲惨であった。ガブリエーレが生まれたのが1783年ということからお判りのようにフランス革命が絡む。

ここでナポリ王国、またの名を両シチリア王国とフランス革命の関係を述べるためには、ナポリ王国の由来を簡単に復習しておいた方が便利である。もともとシチリアというのはいろいろな民族が入り乱れた所だ。紀元前八―七世紀にはギリシア人が植民し、その後フェニキア人が来て勢力拡張を狙ったりする。カルタゴもここをねらうので、シチリアはローマと提携し、ポエニ戦争後はローマの属州となる。時代が千年ちかくなって九世紀初めにサラセン人＝アラブ人が占領。十二世紀、1130年にノルマン人がシチリアとナポリ地域とを併合し、ここに両シチリア王国が成立する。その後も支配者は転々と替わる。十二世紀末にはドイツ人が征服し、1266年にはアンジェ伯領、1282年にはアラゴン王領、1504年にスペイン王国領となる (1469年にアラゴンのフェルディナンド二世とカスティーリャのイサベルが結婚、両王国が合併し、スペイン王国が成立している)。そしていよいよ十八世紀。十八世紀はスペイン継承戦争とともに始まり、1713年戦争終結のためユトレヒト条約が結ばれ、シチリアはサヴォイ家領、ナポリはオーストリア領となる。時代が十八世紀であるから国どうしの争いというより、王家どうしの争いの面があるのを見逃してはなるまい。そもそもスペイン継承戦争は、1516年以来スペインを支配してきたハプスブルク家が絶え、支配者がブルボン家が変わる時に起こった騒動という一面を持つ。またブルボン家がスペインを手に入れる為に、スペインの海外領土をハプスブルク家 (オーストリア) に割譲したのがユトレヒト条約の一面である。その後、1720年両地域ともオーストリア領となるが、スペインのフェリペ五世はイタリア領に対して野心を抱き続け、1733年ポーランド継承戦争が起こると、フランスに味方してナポリを占領してしまう。つまりポーランド継承戦争というのがオーストリアのハプスブルク家対フランスのブルボン家の戦争であるから、スペインは同じブルボン家のよしみでフランス側につきハプスブルクの領土であるナポリを征服したというわけだ。こうしてポーランド継承戦争を終結のためのウィーン条約で、スペインはオーストリアからナポリ、シチリア、エルバ島などを獲得する。フェリペ五

世の息子ドン・カルロスが両シチリア王国にカルロス三世として君臨することとなる。カルロスはこの時十七歳。1759年彼はスペイン王となったので、両シチリア王国を八歳の息子フェルディナンドに譲る。

このフェルディナンドの治世に関わる記述は、基本的にロングマンのイタリア史のシリーズの一冊 *Italy in the Age of the Risorgimento 1790-1870* by Harry Hearder によるが、煩雑になるのを避け一々註を付けないので御了承願いたい。1768年フェルディナンドはマリア・テレジアの娘、マリア・カロリーナと結婚する。このフェルディナンド四世は、わざとその教育を疎かにされ、そのため若い時に満足に出来たことは狩と釣りだけと言われたほどである。これは彼を傀儡にしておくためのスペイン本国の作戦だったらしいのだが、結婚後は王妃カロリーナに王国と家庭の統治の主導権を握られてしまい、後述するように親オーストリア=親ハプスブルク政権となってしまうのだから皮肉なものである。治世は、当時の啓蒙思想をほどほどに受け入れ順調であるかに見えた。オーストリア継承戦争の終結以来、イタリアは戦乱を免れていたこともこれを助けたろう。が、1789年フランス革命が勃発し、絶対君主と啓蒙派貴族との間に亀裂が出来てしまう。カロリーナは勿論、姉妹のマリー・アントワネットが王妃である国の王政を揺るがす騒動を喜ぶはずはなく、1789年お気に入りのイギリス人ジョン・アクトンを首相に任命し、あらゆる革命的思想の芽を摘もうとする。それに対しインテリ層は、王妃のオーストリア寄りの傾向、アクトンのイギリス寄りの傾向はナポリ王国の国益を正しく反映していないと考え、二人に対し批判的であった。

フランスも92年12月ナポリ港に艦隊を派遣し、フランスに敵対的な政策を変更するよう求めた。が、1793年1月ルイ十四世が処刑されると、アクトンは王妃カロリーナを説得し、7月イギリスと対仏同盟を結ばせる（『イタリア現代史』森田鉄郎・重岡保郎著、山川出版社、p. 63）。そうして、シチリアの諸港をイギリス海軍に提供したのである。この同盟はナポリを対仏戦争に巻き込むことになるが、後述する。翌1794年、君主政に対する陰謀が発覚する。さらに1795年シチリアで、フランスのジャコバン派と関係のありそうな陰謀が発覚すると、ナポリ王国政府は過剰に反動的になり、95—97年にかけて、警察による取り締まりが乱暴なまでに行われた。その間1796年にはナポレオン・ボナパルトがイタリア方面軍指令官となり、97年北イタリアおよび中央イタリアを征服する。ナポレオンの動きはその後のイタリア全体（といっても勿論、統一前のイタリアではあるが）にとって重要なので、もう少し詳しくみよう。

1796年3月2日、ナポレオンは、総裁政府により、イタリア方面軍司令官に任命される。2ヵ月たたぬうちにピエモンテを破ると、5月8日、ミラノにいたオーストリアの総督は逃げてしまう。その数日後、ナポレオンはオーストリア軍に対する最初の大勝利をロディで得る。ロディでの勝利から五日後ナポレオンはミラノに入城し、住民に大歓迎される。フランス軍の占領下ではあるが、ミラノのジャコビーニ（イタリアのジャコバン派のこと、単数はジャコビーノ）は市政を改革する。ナポレオンはロンバルディアを掌中におさめるが、7月に包囲を始めたマントヴァはなかなか攻略できず1797年2月まで足止めをくう。2月にマントヴァが陥落すると教皇ピウス六世は、トレンティーノの和約を受け入れ、アヴィニョン、ボローニャを割譲している。ナポレオンはその後ウィー

ンに向かい、4月18日レオベンの和約をオーストリアとの間に結ぶ。オーストリアはこれによってベルギーをフランスに割譲する。さらに、オーストリアはナポレオンがイタリアにつくった国、チサルピナ共和国を承認するのだが、これには裏がある。ヴェネチアをオーストリアに渡すことだ。5月ナポレオンはヴェネチアを攻めおとし、千年続いた共和国もここに消滅する。フランスとオーストリアの間の正式の条約は10月カンポ・フォルミオの和約として結ばれ、オーストリアはアドリア海諸島をのぞくヴェネチア領を獲得した。

この間ナポリは傍観者でいることが出来た。

ところが、翌1798年2月15日、フランス軍はローマに共和国を設立する。教皇ピウス六世は、神によって与えられた地上を治める権利を放棄しないと宣言するが、2月20日フランス軍は2日以内にローマを退去するよう教皇に命じたので、教皇はすぐさまシエナに行き、南仏のヴァレンスで没する。衝撃的な事件である。十四世紀のアヴィニョン補囚以来、教皇が強制されてローマを離れたことはなかったのだから。ローマがフランス軍に占領されたのを見て、ナポリ政府はオーストリアと条約を結ぶ。

カンポ・フォルミオ条約締結の後、ナポレオンは、1798年4月総裁政府の命を受け、東地中海とインドにおけるイギリス勢力打破のための拠点をつくろうとしてエジプト遠征を行う。だが、ナイル河口のアブキール湾でイギリスのネルソン提督の奇襲に遭い艦隊が全滅する。そのネルソンがナポリに寄港すると、王妃カロリーナやお付きの者に英雄扱いされたのも当然といえよう。またネルソンは王妃とは個人的な繋がりがあったのである。というのも、ナポリ王国在住のイギリス大使の夫人エマ・ハミルトンは、ネルソンの愛人であり、王妃の親しい友人であったから。ネルソン提督とハミルトン夫人の関係は1987年の「イギリスのカリカチュア展」(国立西洋美術館)に出品された戯画にも描かれていた。この有名な戯画ではハミルトン夫人はえらく太った女性として登場している。

1798年ナポリのフェルディナンド四世は、イギリス、オーストリア、ロシアの支持を得て、11月フランス軍を追い払い、ローマを占領する。(この時ローマには、実質的にはフランス軍により98年2月に樹立されたローマ共和国があった。この短命な共和国は99年の9月に滅びてしまう)。それも束の間、数週間でナポリ軍はフランス軍に破れ、ローマから敗走する。フランス軍は追ってナポリ王国に侵入してくる。王フェルディナンドと王妃マリア・カロリーナは、イギリス海軍ネルソンの艦隊に助けられて、シチリアのパレルモに難を逃れる。

ここで、われらのロセッティ家との関係が生じる。前述のように、ガブリエーレ・ロセッティの父、ニコラ・ロセッティは、アドリア海沿いのヴァストで鍛冶屋・錠前師をいとなんでいた。そこへフランス軍がのりこんできて、馬蹄の修理や、食料・物資の支給や輸送を命じられたが、要求に全く応じようとしなかった。そのためフランス軍に殴られたり、酷い仕打ちをうけるはめになった。この肉体的・精神的打撃は、彼の健康をむしばみ、1800年ごろニコラは死ぬ。

一方ナポリ王国の命運はというと、フランス軍は主のいない首都ナポリに侵入しようとするが、「ラツァローニ」の抵抗にあいてこずる。ラツァローニというのは、乞食や浮浪者を指すが、

その他漁師や港湾労働者も含まれていた。

99年1月ナポリのリベラル派は、パルテノペーア共和国を宣言するが、実権はフランス軍が握っていた。パルテノペーアというのはナポリの古い名前である。

ところが、4月オーストリア軍がミラノを奪還したのを期に、反革命の狼煙が上がる。8月までにジェノヴァを除く北イタリアのほとんどがフランスから奪いかえされた。ナポリでも連動した動きがある。農民は、パルテノペーア共和国に、封建制の廃止と土地の再分配を求めたがかなえられない。そればかりか、フランス軍が彼等を略奪したり、乱暴狼藉をはたらくので急速に反共和制に傾いていき、カトリックの僧侶のブルボン朝の復活に力をかせよという声に耳をかたむけるのであった。これらの反革命分子を組織したのが、枢機卿ファブリツィオ・ルッフォである。ルッフォはシチリアに渡って国王フェルディナンドから2月ナポリ王国の副司教、イタリア半島の長靴のつまさき部分のカラブリア地方の警察委員に任命された（『反革命—理論と行動1789—1804』J・ゴデン著、平山栄一訳、みすず書房、pp. 274—6）。ルッフォは2月7日、カラブリアの小村ペッツォに上陸、カラブリアの農民を「サンフェディスティ」という名の軍に組織する。サンフェディスティというのは聖なる信仰者という意味である。ルッフォは道路建設税や民兵税を撤廃し、農業日傭労働者をはじめ職人たちを惹きつけた。ルッフォは北上を続ける。

ところがパルテノペーア共和国を支えていたフランス軍は、イタリア北部に召還されてしまう。チサルピナ共和国へオーストリア軍が迫ってきたからである。それに乗じてルッフォのサンフェディスティ軍は5月カラブリア地方全土を掌握し、首都ナポリの攻防が5月24日から6月19日まで続いた。共和国側とナポリに残った少数のフランス軍は、二つの要塞に立て籠もっていたが、降伏と引き換えに、フランス軍はフランスへの海路での帰国やナポリでの身の安全を保証された。

そこへやって来たのがネルソン提督で、6月24日のことである。ネルソンは、イギリス大使ハミルトンとその夫人エマと一緒に来て、艦隊をひきつけてきた。ネルソンとハミルトンは降伏の協定を破り、共和国の中心人物の処刑を主張した。7月8日にナポリに戻った王フェルディナンドはそれに同意するのである。マリー・アントワネットの妹である王妃マリア・カロリーナが革命に極度の敵意を抱いていたこともこの決定にあざかったことだろう。ネルソンはフランス軍の引揚げには同意したが、共和主義者たちの処刑を主張し、百人以上が裁判で死刑となり処刑された。その犠牲者の中には、海軍大臣カラッチョーロ、女流作家ピマンテール、科学者チリッロ、政治理論家ルッソといったナポリの代表的文化人や貴族が含まれていた。特にルッソは『政治思想』という著書を持ち、農業と平等に基づく社会というこれまでにない革命のヴィジョンを描き持っていた（『イタリア人民の歴史Ⅱ』G・プロカッチ著、豊下楯彦訳、未来社、p. 69）。

こうしてナポリでは反革命が成功し、旧体制＝アンジャン・レジームが復活した。イタリア中部でも反革命は成功し、北イタリアにはオーストリア・ロシア連合軍が侵入した。ルッフォにより農民に約束された減税や土地の再分配はブルボン王朝により反故にされ、実現はしなかった。その後約五年間まがりなりにも平和が保たれる。

国際的には、1799年11月ブリュメール18日のクーデターでナポレオンがフランスの政権を握り、

対外戦争を再開。1800年6月ナポレオン自らがアルプスを越え北イタリアのマレンゴでオーストリアと戦いからも勝利する。その後12月モロー将軍がラインのホーエンリンデンでオーストリア軍を破り、1801年2月オーストリアとのあいだにリュネヴィルの和約が成立する。これにより、フランスはカンポ・フォルミオ条約の線まで領土を回復した。ついで1802年3月にナポレオンはイギリスとアミアンの和約を結び、フランスは全面的平和を獲得する。この条約でフランスは北イタリアを確保するかわりに、教皇領とナポリ王国からの撤退を約束する。しかしこの平和は長続きしない。1803年5月にアミアンの平和は破れ、英仏は再び交戦状態に入る。

ナポリ王国にもフランス軍が侵入したため、フェルディナンドはまたもイギリスの助けにたよるざるをえない。

1804年5月ナポレオンが皇帝となる。翌1805年4月イギリスとロシアの間に同盟が成立し、オーストリアとナポリもこれに参加して第三次対仏同盟が形成される。10月イギリス本土上陸を目指すフランス・スペイン連合艦隊とイギリス海軍とがトラファルガー沖で激突し、イギリス軍の大勝利に終わる。ナポレオンは11月ウィーンに入城し、オーストリアと交渉するが、成功しない。12月アウステルリッツで、ロシア・オーストリア連合軍とナポレオンの軍隊がぶつかり、これはナポレオン軍が見事な勝利を得る。その直後オーストリアはフランスとプレスブルクの和約を締結する。

その余波はナポリにも及ぶ。1806年2月フランスがナポリを占拠し、ナポレオンの兄ジョセフが王となったのである。フェルディナンドとカロリーナは再びイギリス艦隊の保護下のシチリアに流浪の身となってしまふ。シチリアは1806年から1815年までイギリス軍が占領していたのである。

シチリアの内政にイギリスは最初は干渉しなかった。しかし、1811年ウィリアム・ベンティンク卿がシチリア駐屯軍司令官としてパレルモに赴任すると事態が変わる。表向きはブルボン家が統治していることになっていたが、シチリアを実際に支配したのはベンティンクであった。彼はシチリアを立憲制にしようとするが、王妃マリア・カロリーナがこの動きを邪魔する。彼女はイギリスがシチリアを併合しようとしているのではないかと疑っていたのだ。彼女がナポレオンの義弟ミュラと秘密に交渉していることが1812年3月に発覚し、ベンティンクとの確執は一層強まる。結局、イギリスにならった立憲制がしかれ、6月国会が招集される。王妃マリア・カロリーナはついに1813年6月ベンティンクにより追放され、海路コンスタンチノーブルから黒海沿岸のオデッサをまわって故郷のウィーンに着き1814年に亡くなる。ベンティンクのほうも、国際情勢の変化にともない立憲政治の実験は終わったと本国の外相カスルレーに告げられ、1814年6月シチリアを去る。

ナポリの方とは言う、ジョセフの王位は二年後彼がスペイン王になるまで続く。ジョセフは1806年8月に封建制を廃止するが、土地の再分配はうまく機能しなかった。1808年6月ヨアヒム・ミュラ将軍がナポリ王を継ぐ。ミュラはナポレオンの妹婿である。この間ナポレオン体制に反発する共和主義者たちの秘密結社がいくつも生まれている。カルボネリア（炭焼党）もその一つで、ジョセフやミュラの統治下で、しだいに形を成していく。

先へ急ごう。1812年6月ナポレオンはロシア遠征に出発し、冬将軍に敗れて退却する。ミュラもこの遠征に加わるが、脱走同然にナポリに逃げかえる。ミュラは勝手にオーストリアやイギリスと

交渉し、1814年1月対仏同盟側に寝返る。ナポレオンは4月に退位を余儀なくされ、5月エルバ島に流される。ところが同年9月に始まったウィーン会議で、ナポリ王国がブルボンに戻りそうな形勢となる（ウィーン会議は翌年6月まで続く）。そこへ1815年2月にナポレオンがエルバ島を脱出し、百日天下が始まる。ミュラはふたたびナポレオンに接近し、3月に北イタリアに兵を進め、アドリア海沿岸のリミニでイタリアの独立と統一を呼びかける。しかしあい続く戦乱に疲弊した人民は集まらず、ミュラは5月トレンティーノでオーストリア軍に破れ、ナポリ領に退却する。ミュラは5月20日にナポリを脱出し、ナポレオンの陣営に参加しようとしたのだが拒否される。6月ナポレオンはワーテルローの戦いに大敗し、退位する。8月ミュラはコルシカ島に渡る。9月の末、ブルボン復古王朝の不人気を衝いてナポリ奪還を図ったが、嵐にあいカラブリア海岸に漂着したところを捕えられ、10月13日死刑に処せられた（前掲書『イタリア現代史』、pp. 74—76）。彼は政治的にイタリアの統一を試みた最初の人物であった。

1815年、百日天下のあと、フェルディナンドはナポリに復帰する。翌年12月に、1812年に制定したシチリアの憲法を廃し、シチリアとナポリを合併する。これが両シチリア王国である。シチリアの立憲制は四年しか続かなかったわけだ。復帰に際し、フェルディナンドは忌まわしい過去をふりすてるためフェルディナンド四世という呼称を改め、新たに造った両シチリア王国のフェルディナンド一世と呼ばれることとなった。この王国はオーストリアの息のかかったものであった。オーストリアのメッテルニヒ外相（のち宰相）とイギリスのカスルレー外相の間で、どんな王国にするかは密約があったのだ。これはナポリだけのことではなく、イタリアの諸国は直接・間接にオーストリアの影響下に置かれた。両シチリア王国で最初の宰相となったのは、ルイージ・デ・メディチであった。メディチはミュラ時代に断行された改革をほぼ受け継いだが、立憲制は取り入れないという「混合政体」であった。しかし後者には理由があった。1815年6月にナポリとオーストリアの間に立憲制をとらないという秘密協定が結ばれていたのだ。それをしらないリベラル派や秘密結社カルボネリア（炭焼党）の党员等は不満に思っていた。

メディチはおおむね啓蒙的な態度であったが、教会に関しては反動的な政策をとった。1818年2月にローマ教皇庁と結んだ政教協定では、ジョセフやミュラの時に行われた教会財産の没収を認めるかわりに、修道院の再建や教会裁判権の復活を認めた。中でも、最も不評だったのは、司教に出版物の検閲権を認めたことであった。

1820年1月スペインで立憲制を求める軍隊の「決起」が成功すると、それに刺激されたカルボネリアがまず7月1日に行動を起こした。7月5日ミュラ派のグリエルモ・ペペ師団長が指揮して軍隊が決起する。翌日6日、フェルディナンド一世は一週間以内に憲法制定を約束する勅令を発布。革命軍は一週間はあまりに短いので疑わしく思い、1812年のスペイン憲法と同じものを要求する。これは男子普通選挙と直接選挙、一院制を定めたものである。翌7日政府は1812年式の憲法を約束する。そして革命軍はナポリに無血入城した。

新政府はミュラのもとで働いた人々から成った。革命から三箇月後の10月1日、憲法に基づいて選ばれた国会が招集された。

その間に、シチリアでは情勢が緊迫していた。そもそもシチリアは1816年からナポリと合併されたことを快く思っていなかった。憲法が廃止され、パレルモが無関税港ではなくなってしまったことなど、イギリス占領下に受けた恩恵を失ってしまったからである。ナポリの革命の知らせを受けるとパレルモでは暴動が起こった。シチリアの分離独立と「1812年の憲法」を求める声が上がったが、「1812年の憲法」は貴族や聖職者にとってはイギリスにならったシチリアの憲法を意味し、72の手工業組合に組織された市民層にとってはより進歩的なスペインの憲法を意味していた。両者の主導権あらしめは、結局手工業組合「マエストランツェ」ひきいる急進派が勝ち、7月17日には実権を握る。この革命派の弱点は、パレルモに限定されていたことである。東部のメッシーナなどはパレルモへの反発（カンパニリズム＝おらが^{わら}邑主義）からナポリ政府との統合を支持していた。ナポリのカルボネリアもパレルモの革命に共感を示さなかった。9月26日ナポリの革命政府はシチリア分離を主張するパレルモに攻撃をかけるが、抵抗も激しく雌雄を決することが出来なかった。

こうして10月1日パレルモに火種を抱えたまま、ナポリ本土では国会が開催される。代議士はほとんどが中産階級か知的職業に従事するものであった。

一方オーストリアのメッテルニヒは事態の推移をどう見ていたか。彼はナポリの1820年の革命をイタリアにおけるオーストリアの立場全体を揺るがすものと捉えていた。イタリアのいかなる国も憲法など持つてはならないと考えていたのだ。彼はイギリス、ロシア、プロイセン、オーストリアの間で締結された四国同盟を利用することを思いつく。10月トロッポで会議を開くが一般的な現状維持・革命反対という結論しか出ない。フェルディナンドは密かにナポリ出国した旨をメッテルニヒに伝える。もう一度翌年1月にライバハで会議が開かれ、フェルディナンドも招かれる。王は憲法を守ることを約束し、国会の同意なしには改憲には応じないと言って出発する。ところが、ナポリを脱出するなり、彼は憲法はむりやり発布させられたものであると言い放ち、オーストリアの軍事介入を要請する。メッテルニヒもこれに応じ、3月23日ナポリはオーストリア軍の手に落ちるのである。

これに続いてフェルディナンドは革命派を手当たり次第弾圧した。立憲君主制を望んだ穏健派と純粋な革命派の区別をしなかったのだ。このあおりを喰ってわれらのガブリエーレも亡命を余儀無くされるのである。

*

ここで、ガブリエーレ・ロセッティに戻ろう。ガブリエーレが生まれたのは1783年だから、フランス革命以前であり、フェルディナンドがまだフェルディナンド四世と称し王妃カロリーナも健在の時だ。前述のように、大家族で男四人女三人という七人兄弟である。ちなみに長兄のアンドレアは教会の参事会員となったが、次兄のドメニコは医学、法学、神学に通じ、イタリア語、ラテン語、フランス語を書き、ヘブライ語も少しでき、詩を書きもし、即興でつくりもした。三番目がガブリエーレ。弟のアントニオは鬘をつくり、床屋を営んだ。

ガブリエーレが6歳のときフランス革命がおこり、フランス軍のナポリ王国への侵入があり、父

親のニコラはフランス軍への協力を拒んで痛めつけられ、1800年頃死ぬ。ニコラの妻、つまりガブリエーレの母は1822年まで生き延びる。当時、土地の有力者はヴェストの侯爵トマソであったが、彼が詩作や絵画に才能をあらわしたガブリエーレを援助して、1804年ナポリ大学へやってくれた。侯爵はスペインの旧家ダヴォラ家の出であった。ダヴォラ家はミケランジェロが愛した女流詩人ヴィットリア・コロンナの嫁ぎ先であり、スペインからイタリアに移住したのである。その年ナポレオンは皇帝になる。翌年フランス軍はアウステルリッツでオーストリア・プロシアの連合軍を破り、北イタリアを手の中にし、ナポレオンはイタリア王を名乗る。さらに翌年1806年ナポリもフランス軍に占領され、ナポレオンの兄ジョセフがナポリ王となる。ヴェストの侯爵は、王室の宮宰だったのでフェルディナンドとともに姿を消した。ガブリエーレの学校生活も突然おわりを告げる。一年一箇月であった。息子のウィリアムの回想録 (*Family Letters and a Memoir of Dante Gabriel Rossetti* vol. 1 p. 6) によると、中年になったガブリエーレは、ラテン語を楽に読みこなし、幾何と数学を少し覚えていたが、ギリシア語は全く知らなかったという。フランス語にはよく通じ、べらべら喋った。英語もマルタ島とイギリスで習得し、まあまあ読めたり話せたが、イタリア語で用が足りる時には決して使わなかったという。一体に、ウィリアムの記述はすこぶる具体的であり、家族への愛情がこちらに伝わってくるが、それでいて感傷的でないという美德を備えているが、ここもその例に洩れないと思う。無縁の人にはどうでもいいような細部を書き留めてあるのが嬉しい。

こうしてガブリエーレは23歳から32歳まで(1806—1815)をフランスのナポレオン体制下で過ごす。具体的には、ナポレオンの兄ジョセフ王とナポレオンの妹婿ヨアヒム・ミュラー王が統治した。風が吹けば桶屋が儲かるの伝でいけば、ナポレオンのせいで学校をやめさせられたガブリエーレであったが、フランス軍およびナポレオンをどうみていたろうか。

ひとつには、フランス軍を専政から解放する自由の使者と見ていた。例えば、彼のソネットにナポレオンを肯定的に歌ったものもある。無理からむことではある。ジョセフは封建制を廃止し、貴族は自分の法廷を持つことがなくなり、税に関する特権なども廃止された。ミュラーのもとでも徴税制度や警察の近代化・中央集権化がはかられた。その一方でナポレオン個人に対しては晩年に著した韻文の自伝(息子のウィリアムが英訳)の中では、‘Oh Bonaparte *thou* the object deemed/Of worship? Ah he lies who calls thee great?’ 「ああボナパルトよ、お前なぞ崇拜する値打ちがあるのか。お前を偉大だという奴原はうそつきだ。」(*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, p. 22) と結論づけてはいるが、すぐにそういう結論を下したのではない。この少しまえに、

France in my youthful fervency I loved,
But, when I heard, “He’s made an Emperor now,
Nor that alone, but despot autocrat,”
The hate I felt extinguished all that fire.

若者の熱き心を持って私はフランスを愛した、
 が、「かれは皇帝になったぞ、そればかりか
 専制的独裁者になったのだ」と聞いた時、
 私の怒りは熱情の炎をかき消してしまった。

とある。ベートーヴェンと同じ憤りであるのが面白いが、ベートーヴェンと同じ頃、イタリアで超売れっ子だったのがロッシーニであり、ロセッティは後に

Rossini, Rossetti,
 Divini, imperfetti

ロッシーニとロセッティ
 崇高と未完成

とナポリっこに囃された。(実際の二人の関係よりも音の面白さのために並び称せられたのだ)。

時間を戻そう。1807年ガブリエーレはある男爵の援助で最初の詩集をナポリで出す。それをきっかけにサン・カルロ歌劇場と台本作者としての契約を結ぶ。彼は三作ほど書き、第一作が *Giulio Sabino* である。ほかにハンニバルのカプア（イタリア南部の都市）での戯れの恋を扱ったものやヘラクレスの生誕を扱ったものがあるという。これらは次々に成功したらしい。先ほどふれたロッシーニは1810年にヴェネチアで『結婚手形』を初演しオペラ作曲家としてデビューし、ナポリでも1816年『オテロ』、1818年『エジプトのモーゼ』を初演しているので、先のカプレットの囃し文句が生まれたのだらう。ちなみにロッシーニの父親は1796年にポローニャをフランス軍が占領したさい共和制に与したかどで、旧体制の復活後、一時投獄されている。

しかし、ガブリエーレは作曲家や支配人や歌手の要求や陰謀に悩まされ、リブレッティストを辞職する。オズワルド・ドーティなどは陰謀というのをガブリエーレの妄想であるかのように仄めかしているが、どうだろうか。現在でも歌劇関係者の足のひっぱりあいや中傷は日常茶飯事と漏れ聞く。だから、必ずしもこれをガブリエーレの被害妄想とは言えないと思うのだ。彼は職を辞し、ナポリ博物館の副館長となった。これは特に最初のうちは大変薄給であったとウィリアムが註をつけている。年収約30ポンドであったというのだ。年収30ポンドというのは大体住み込みの女家庭教師ぐらいの収入である。後にウィリアム自身は税務署につとめて110ポンドの年収を得ている（例えば、*The Language of Exclusion: The Poetry of Emily Dickinson and Christina Rossetti* by Sharon Leder with Andrea Abbott, p. 77 を参照）。

ガブリエーレはミュラ王の宮廷でうけが良く、1813年には文部次官にまでなり、ローマに派遣されている。ところが、1815年ナポレオン体制は瓦解する。イタリアはほとんど1789年のフランス革命前と同じ領土・体制に復する。ナポリにはブルボン王朝が復活する。炭焼党はフェルディナンド

が憲法を制定してくれるものと期待して、一時はこの君主を歓迎するが、すぐにその期待は失望に変わったわけだ。

何故かはわからぬが、旧体制に復してもガブリエーレは博物館の職は失わなかった。その職にある時おそらくは1819年に起こった小さな事件を紹介しよう (*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, p. 19)。ナポリ王フェルディナンドの兄はスペイン王カルロス四世である。この王はゴヤの『カルロス四世の家族』から判るように凡庸な王で、王妃の愛人マヌエル・ゴドイが宰相となり実権をふるっていた。ゴドイはナポレオンとポルトガルの分割を取り決める。分割のあかつきにはゴドイが半分自分のものにするというのだ。このフォンテヌブロー条約でスペイン内の軍隊通過権を得たナポレオンは、ポルトガル制圧を口実に1807年秋から1808年春にかけて約10万の軍隊を進攻させる。ポルトガルの首都リスボンが戦わずして陥落した後もナポレオンは軍隊を送り込むことをやめず、北部スペインの諸都市を占領しはじめる。この総司令官がミュラ、後のナポリ王である。1808年2月ナポレオンは本性をあらわし、ポルトガル全土か北部スペインを譲れと、スペインに迫る。王は、スペイン領のアメリカに逃れることに決め、いったん宮廷をマドリードの南アラソスに移す。そこで国民や大貴族の王とゴドイに対する不満は爆発する。3月17日王子フェルナンドを擁立するクーデターが成功、ゴドイは逮捕され、国王も退位する。ミュラは直ぐに、マドリードに向かい、3月23日占領する。ミュラはフェルナンドにナポレオンとバイヨンヌで会見するように進言する。スペイン国境に近いフランスの町バイヨンヌで、思惑を異にしたフェルナンド、カルロス親子がナポレオンに会う。フェルナンドは退位させられ、父カルロスに王位を返還するが、カルロスも直ちにその王位をナポレオンにめしあげられる。結局、二人とも王位を断念させられ、ナポレオンの兄ジョゼフがスペイン王となる。ジョゼフはナポリ王であったから、そこで空位となったナポリ王にミュラがついたわけである(本稿6ページ参照)。これを機に、スペインはフランス軍との激しい独立戦争(1808—14)に突入する。アラゴン・アンダルシアといったフランス軍に侵入されていない地方では貴族とブルジョアジーにより「フンタ」という地方議会が設置され、中央議会がスペイン半島の南端の港町カディス(時代の申し子バイロンのドン・ジュアンはこの港から諸国流浪の旅に出る)に招集される。ここで1810年から開かれた中央議会が制定したのが1812年憲法である。この憲法は主権在民など自由主義的な色彩の濃いものであった。それがシチリア・ナポリの立憲政治を求める運動に影響を与えたのは前に述べた通りである。しかしながら、ついに1814年ナポレオンがスペインから敗退すると、保守派の将軍がクーデター宣言により1812年憲法を無効とし、フェルナンドを王位につけた。国民から待望されていたフェルナンドの治世は、抑圧・反動のかたまりであり、失政の連続であった。それへの反発が1820年のクーデター宣言(プロモンシアメント)につながり、フェルナンドは1812年憲法を認めることになる。この1820年のプロモンシアメントが刺激して、同年のナポリでの軍の決起(プロモンチアメント)を誘発する(本稿7ページ)ことになったのである。

ガブリエーレ・ロセッティとカルロス四世の関係に戻ろう。カルロス四世はバイヨンヌのあとフランス・イタリアへ亡命する。ガブリエーレとのエピソードは1819年ナポリでの話だ。スペインの

前国王カルロス四世は、ガブリエーレの勤める王立博物館を訪れた。それに先立ち、正式な使者が派遣され、軍楽隊が太鼓を打ち鳴らし、門には哨兵が立ち、職員も総裁をはじめ出迎えに立った。最初に見学したのがガブリエーレが担当のギリシア・ローマの大理石像、青銅像であった。彼はイタリア語を流暢に話す国王に、館所蔵の傑作を紹介してまわった。ふとあることを思い出しトラヤヌス帝の像の前で止まり、トラヤヌスがローマ帝国の人でありスペインの人であることを申し上げた。「なに、トラヤヌスはスペイン人か？」と王は驚きの声をあげた。「左様でございます、陛下、スエトニウスなどの歴史家の申すことが真実でございますれば。」(スエトニウスというのはあてずっぽうで、かれはトラヤヌスについては何も書きのこしていないというウィリアムの註がある)。王は館をめぐる、ガブリエーレの説明にしごく満足の様子。彼はそれから四時間もガブリエーレをしたがえて絵画、エトルリア美術を見てかえる。翌日おなじ時間に、太鼓の音、兵の招集が重要人物の訪れを告げた。またしてもカルロス四世である。予告なしの予期せぬ訪問のため、迎えてたのはガブリエーレのみであった。ガブリエーレの部屋へ入ると王は腰かけ、彼にも腰かけるように勧める。ガブリエーレが躊躇するといよいよ坐れという。王は、昨日見たもので感銘をうけたものをもう一度見たい、とくにトラヤヌス帝の像が、と言う。「スペイン人ということはわかったから、君の知っていることを全て教えてくれ。」ガブリエーレはトラヤヌスが、ローマ軍の全員一致で皇帝に選ばれ、オプティムス・プリンケプス(最善の元首)と呼ばれたこと、臣民の愛を信じ反逆罪を廃止し、自分の館にだれでも来れるようにしたこと、等々を話して聞かせた。三日目、王はガブリエーレを再訪する。前日同様、ガブリエーレと二人きりになる。結婚しているかと尋ねられたガブリエーレは否と応えると、君主間の四国同盟がヴェローナで開かれる予定だが、彼はそこで息子フェルナンドに篡奪された王位復活を主張するつもりだという。(この四国同盟のヴェローナ会議は実際には1822年に開かれた)。「きっとそうなると思うが、スペインに帰ることになったら、君も一緒に来てくれ。エスコリアル宮殿の長にしよう。」「お言葉ではございますが、陛下、スペインにも優秀な方が——」「そこを治めておるのはわしの敵だ。そいつを敵首にするつもりだ。」「わたしはここにお仕えしておりまして、陛下の弟君が——」「や、もう昨夜話してある、快諾を得ておる。」ガブリエーレはふかぶかと頭を下げ、カルロス四世の意を謝した。その数日後、カルロス四世は、弟フェルディナンド一世の宮殿で不埒の人となり横たわっていた。カルロスと話好きで、他の人ともこんな会話をかわしていたという。彼の復位の権利は明白で、息子が大臣を使って父を亡きものにしようとした、そんな噂がナポリじゅうを駆け巡った(*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, pp. 20—22)。

1820年7月、炭焼党員が多数いた軍隊の「決起」を中心に立憲革命が起こった。その年のはじめころ、あるパーティでガブリエーレはデンマーク皇太子(後のクリスチアン八世)にあう。ヨーロッパ中を巻き込んだ大騒動であるフランス革命とデンマークも無縁ではなく、皇太子もノルウェイの森でフランス軍と戦ったことがあった。会のおわりに詠んだ詩に感動した皇太子はガブリエーレにこの場に来られなかった妻のために一冊詩集が欲しいという。翌朝、ガブリエーレが自作を筆写しおわった頃、皇太子の家令が来て、翌日の晩餐会に招かれる。皇太子は何度かガブリエーレを各

国大使列席のパーティに招くのだが、その年の末、ナポリで革命が成功し王が国外に出たあと、ある晩、皇太子はガブリエーレを呼び寄せ、「今年の冬は北イタリアで過ごすつもりだ。王妃に美しいイタリア語を教えるため同行してはもらえまいか。」と言う。「しかし陛下、仕事がございます。」「もう内務大臣には話してある。六箇月の休暇をくれるそうだ。」ガブリエーレにとってこの申し出が嬉しくないはずはない。だが、ガブリエーレは王がナポリの人々を裏切るつもりなのだということがわかった。つまりこうだ。皇太子はなんらかの外交ルートを通じてナポリを離れるよう警告された。そこで、ガブリエーレが巻き込まれそうな政治的な危機から彼を救いだそうとしたのだ。この不吉な考えを承知したうえで、名誉な申し出に感謝しつつも、即答を避けた。翌日、ガブリエーレは皇太子に手紙を書く。祖国が危機に曝されそうなのがわかっていて、逃げ出すなら卑怯と言われても仕方ありません。結局こうしてこの親切な申し出を断るのだが、ガブリエーレはそのことを後悔しなかったのである。その年1820年の後半に彼は炭焼党員になっているが、これは王が憲法を認めて後のことであったから、なんら問題はなかった。しかし、彼の詠んだ歌が問題となる。‘Sei pur bella cogli astri sul crine’「髪に星を飾ったお前は素晴らしい／サファイアのようにきらきらと光り」で始まる詩は、ナポリ中の人々の口の端にのぼったという。彼はこのほかにもいくつもの詩をその時につくったわけだが、その中の一つに次の一節があった。

I vindici coltelli

Sapran passarvi il cor :

I Sandi ed i Luvelli

Non son finiti ancor

復讐の短刀が

心臓をつらぬくぞ。

サンドヤルヴェルが

いなくなったわけではない。

これは、ライバハの四国同盟の会議にフェルディナンドが出席し、フェルディナンドによって黙認されたオーストリア軍のナポリ領侵略が差し迫ったときに書かれた詩である。サンドは詩人コツェブを暗殺した犯人で、ルヴェルはフランスの王位継承者のペリ公爵を暗殺した犯人である。この詩が書かれたのが1821年であるが、コツェブが専制制度に与するという政治的理由で殺されたのは1819年であり、当時は流行劇作家であったことでもあり、サンドによる暗殺は大変なまなましい事件であったはずだ。ところがそれ以上にまなましいのがルヴェルによるペリ公爵暗殺である。ペリ公はルイ十八世の甥で、シャルル十世の子、フランス革命中に亡命し、反革命軍に加わった。大事なのはその後で、帰国後、1816年ナポリ王女マリー・カロリーヌ・フェルディナンド・ルイズと結婚していることだ。つまり、ペリ公とナポリ王フェルディナンドは義理の親子なのである。フェ

ルディナンドにしてみれば、お前は婿殿のように暗殺されるぞ、と言われたようなものだから、逆鱗に触れたのも無理はない。おそらくこれが原因となって、翌年の1822年9月に立憲革命に関与した人への大赦がでたときにも13人が例外とされ、ガブリエーレは13番目に入ってしまったのである。このような時局に関する言及はガブリエーレに特有のことではない。その頃イタリアにいたシェリーも1820年スペインの革命に際しては‘Ode to Liberty’を詠み、ナポリの立憲革命に際しては‘Ode to Naples’を詠んでいる。このついでにガブリエーレの政治観についてふれておくと、彼はシェリーなどとは違って立憲君主制を切望していた。その枠組みの中で、自由と、イタリアの統一を心から願う愛国者だったのである。そこが共和制をのぞむマッツィーニ（後にロンドンに亡命する）とは意見を異にするのであった。ガブリエーレに大赦のでなかったもう一つの理由は、オーストリア軍との戦いに際し、彼がナポリ軍に入隊し（ということは必ずしも第一線で戦ったということの意味しない）彼の詩でもって軍の士気を鼓舞したのではないかということである。その証拠は友人の手紙や彼の詩の一節「兄弟よ、武器をとれ、武器をとれ！ 祖国が我等を呼んでいる。私も、歌をうたって、ともに行こう。」といった傍証ではあるのだが（*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, p. 52）。

1821年3月ナポリはオーストリア軍の手に陥落する。ガブリエーレは3月から三箇月間潜伏する。3月7日ローマの北リエチでのナポリ軍の敗北と、3月21日の国会解散の間の3月18日にロセッティはパスポートを入手したが、彼はそれを使おうとはしないで、潜伏していたわけである。しかしいよいよ身に危険が迫ると、イギリス海軍の提督グレアム・ムアの助けにより、イギリス兵に身をやつしてマルタ島へ脱出する。マルタ島で彼はロマンティックな英雄としてパーティに招かれ、即興詩を所望されもする。マルタ島で過ごした二年半にガブリエーレはナポリにいたときと同様に個人でラテン語、イタリア語、イタリア文学を教えて生活の資にしている。またその地で彼は、生涯の友となるジョン・フリアと知り合っている。フリアはもと外交官で、アリストファネスの翻訳家、いわゆる文人であり、妻の療養のためマルタ島に住み着いたのである。ところがマルタの生活もしばらくするとナポリ政府のスパイや回し者によって嫌な思いをさせられることが度重なる。意を決したガブリエーレは1824年1月にマルタを出航し、4月にロンドンに着く。

ロンドンでは、おなじようにイタリアからきたポリドーリ家と親しくなる。ガエターノ・ポリドーリはイタリアのトスカナ地方の出身で、イギリスへ来てイタリア語を教えたり翻訳をしていたが、ガブリエーレとは違って政治的亡命者ではなかった。ガブリエーレはポリドーリの次女に1825年12月7日にプロポーズし、翌年の4月8日と10日に二度結婚式を挙げている。最初は夫のカトリックで、次は妻のイギリス国教会である。

1826—7年にダンテの神曲の『地獄篇』を註釈付きで出版している。『神曲』全体を出版するつもりが費用の関係でこうなったのである。ガブリエーレはもちろんイタリアにいるときからダンテの作品はよく知っていたが、研究するようになったのはロンドンに定住してからである。研究にとりかかると、ガブリエーレは『神曲』は表面と深層の意味は違うと考えた。初めは、核になる意味は政治的なもの、皇帝派のギベリンと教皇派のグェルフの対立と思ったが、その考えを押し進めてい

って、ダンテは後にフリーメーソンと呼ばれるようになる秘密結社の一員であると考えられるようになった。(ガブリエーレ自身もフリーメーソンであった)。政治的・宗教的に深く反教皇的な思想が含まれているというわけである。さらにそれはダンテだけではなく様々な国の様々な時代の作家がそうなのだというふうにガブリエーレは論じていく。この本を高く評価し、以後自発的にガブリエーレの著作の出版費用を補助したチャールズ・ライル卿への手紙の中で、「ダンテの全詩作品、ペトラルカ全抒情詩、ボッカチオのほとんどの作品、要するに、そのクラスの古い著作の全ては、厳密な意味で、フリーメーソンの教養と実践にはかならないのです。それこそがニーチェのいう楽しい学問であり、プラトンの愛であり、それこそがテンプル騎士団であり、パウロ主義者であるのです」(*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, p. 135)。パウロ主義者というのは、七世紀とくにギリシアに多かった宗派で、善悪二元説を認め、教会の価値を認めず福音書の始源の単純さに戻ろうとした人達である。新約聖書の中のパウロの書簡を重んじるのでこの名がある。ここからも窺えるように、ガブリエーレ自身は、教皇を頂点とする聖職者の位階制は悪であり、原初的な単純さに回帰すべきだと考えていた。だから、彼のダンテ解釈には、彼の宗教観が強く投影されているといっておかしくない。ただし、その当否を判断するのは僕の能力に余ることだ。

このガブリエーレのダンテ解釈に対してコールリッジはある程度評価したというし、ディズレイリ首相の父アイザック・ディズレイリはすっかりこの説に心服したという。いまして挙げたチャールズ・ライル卿も心服した一人で、彼の本職は地質学者であり、そちらの方では、進化論のダーウィンに影響を与えているのだが、ロセッティ家との付き合いも深く、ガブリエーレの長男、ダンテ・ゲイブリエルの代父となっている。(ダンテ・ゲイブリエルの洗礼名はゲイブリエル・チャールズ・ダンテであり、チャールズの部分はライル卿からもらったのである)。テニソンの友人アーサー・ハラムなどは反論を加えた一人であった。『煉獄篇』についても、大部分註釈は書かれた。ウィリアムによれば、出版するのを条件にガブリエーレの故郷ヴェストの市役所に寄贈したという。そして、1901年の時点ではその約束はほごにされたままであった。しかし現在は『煉獄篇』も入手可能である。フィレンツェの書店 Olschki から1967年に出た版がある。未公開作品と表紙には銘打ってあるから随分と時間がかかって出版されたことになるが、ある意味では『煉獄篇』にふさわしいのかもしれない。

結婚後4年連続で子供が生まれる。1827年2月マライア・フランチェスカ誕生。ガブリエーレは家庭内ではかならずイタリア語で話し英語は使わなかったという。とすると長女もマリアと呼んでいたのだろうか。1828年5月12日ゲイブリエル・チャールズ・ダンテ誕生。彼は後に自分からダンテ・ゲイブリエル・ロセッティと名乗るようになる。1829年9月ウィリアム・マイケル、1830年12月5日クリスティーナ・ジョージナが生まれる。クリスティーナの洗礼ではナポレオンの姪にあたる女性が代母(ゴッドマザー)になった。この次第はこうだ。ナポレオンの兄ジョセフは1806年から1808年までナポリ王であったから、ガブリエーレがオペラの台本を書いていた頃に見知っていた。それがロンドンで同じ亡命者としてつきあいが深くなったということだろうか。ジョセフの家ではジョセフの弟ルシアンや甥のルイ(のちのナポレオン三世)にもよくあったという。ルシアン

ンの娘がダドリー・ステュアート令夫人であるが、彼女がガブリエーレと特に親しくなり、彼の娘に自分の名をとって、クリスティーナと名付けてくれたのである。ガブリエーレはあのナポレオン・ボナパルト以外はボナパルト家の人全員と知り合いだったという。

4人の子をもうけたガブリエーレは就職しなければならない。1826年にロンドンにユニヴァーシティ・コレッジが出来て、イタリア文学の教授職に応募するが後に大英博物館の読書室を設計するアントニオ・パニッツィが職をえる。その後1829年にキングズ・カレッジが開設される。(両カレッジが連合してロンドン大学となるのは1836年のことである——「イギリスの生活と文化事典」482ページ)。そこでもう一度イタリア文学の教授職に応募し、1831年選ばれて教授となる。当時は給料を大学から貰うという制度ではなかったらしく、この職について得たのは数人分の授業料だったそうである (*Some Reminiscences of William Michael Rossetti*, p. 2)。しかし一家の収入は年に220ポンドから280ポンドであったというから決して貧困ではない。が、また裕福でもない。1835年にはロセッティ家は町内で狭い家から少しは広い家に引っ越しているが、その家賃が年60ポンド。どの位の広さかという、一階が二部屋、二階が二部屋、三階と四階に五つか六つの寝室があり、小さな裏庭とその他にももちろん地下室があるわけだ。そして使用人は一人だけだったという。六人家族とはいえ、これが中産階級にとっては小さめの家であるのだ。この家のある場所は、ロンドン市内の Hallam Street 50番である。リージェント・パークとオックスフォード・ストリートに挟まれた区域で、当時は住宅地としては落ちるところだったというのだが。この六人家族を養うため、ガブリエーレは精力的にイタリア語の個人教授をした。その謝礼は一時間半ギニー（1ギニーは1ポンド1シリング）であった。参考のために付け加えると、この当時の女家庭教師の年収が30~60ポンド、女中の年収が12ポンド、後にウィリアムは税務署で働いて年収110ポンド（1851年）といったところである (*The Language of Exclusion* by Sharon Leder and Andrea Abbott, pp. 73-77)。

一言で言えば、ロセッティ家は中産階級としてはつつまじやかな生活を送っていたということだ。だからガブリエーレが本を出すときも、マルタ島で知り合ったフリアをはじめとする友人たちの援助によらねばならなかった。勤勉に働くガブリエーレの健康は1842年頃から悪化し、仕事もできなくなる。翌年にはそれまで非常によかった視力が、片方は黒内障のため失明し、のこるもう一方の眼も危機的な状態に陥った。ガブリエーレは1854年4月に亡くなり、ハイゲイト墓地に埋葬されているのだが、最後にガブリエーレと青年イタリア党を結成したマッツィーニとの関係について述べて、ガブリエーレについての記述の一区切りをしたい。

*

ジュゼッペ・マッツィーニは1805年生まれ、ジェノヴァ出身の革命家にして文学者である。大学卒業後、1827年（一節には1830年）炭焼党に入党し、ジェノヴァ支部の書記になる。ところがすぐに彼は炭焼党の組織自体に疑問を持つようになる。そもそも炭焼党はフリーメーソンの流れをくむ秘密結社で、入党や党員の昇格には象徴的な儀式が行われる神秘的性格の強い結社である。党員を

弟子（アッペンディスタ）・親方（マエストロ）・大親方（グランマエストロ）の三階級に分け、それぞれの階級により結社の綱領＝教義問答書（カテキズモ）を異にしていた。第一の弟子段階では、人道主義的な宗教・倫理的綱領が主で、第二の親方段階では民族独立や立憲制などの政治綱領を掲げ、第三の大親方になると農地均分法を軸とする社会的平等と共和制を目標とするのである（『イタリア民族革命』森田鉄郎著 近藤出版社、58—9ページ）。ナポリの革命の失敗後は本拠地をパリに移して国際色を強めたが、位階制は固く維持し、末端の党員は運動全体の見通しを得ることなくパリの本部から断片的な指令に絶対服従するしかなかったのである（同上書、107ページ）。しかしマッツィーニは入党式を行った男の裏切りで1830年の暮れに逮捕され、ジェノヴァの西数十キロのサヴォーナに投獄された。三箇月の後、国外退放にあい、1831年4月マルセイユで「青年イタリア党」を創設する。それは友人宛の手紙によれば、「いかなる秘義も位階制もシンボルもない」青年の友愛団体だと記している。つまり炭焼党など従来の結社の位階制を克服し、運動の目標を公開した運動体を意図したわけである。最初の反乱はサルデーニャ王国のピエモンテ地方で計画した。しかしある士官の密告により当局の察知するところとなり1833年4月、67人が逮捕され、約200人が亡命した。12人が銃殺刑に処せられ、マッツィーニをふくむ14人が欠席裁判で死刑をもうしわたされた。後年赤シャツ隊を率いたガリバルディもこの年青年イタリア党に参加している。彼は、マッツィーニの次なる計画、サヴォイへの進攻に呼応すべくジェノヴァで待機していたが蜂起は事前に当局の知るところとなりガリバルディはマルセイユから南米へ逃れ、欠席裁判で死刑を宣告された。マッツィーニはスイスにとどまり潜伏していたが、1834年4月スイスのベルンで青年ヨーロッパ党を結成した。この名からもわかるように、マッツィーニのナショナリズムは、単にイタリアをオーストリアの圧政から解放するというだけでなく、究極的には、個々の国民の自由と平等に基づいた「人類協同体（*associazione*）」を達成することであった。ただし、理想はともかく青年ヨーロッパ党員は17人しかおらず現実政治の上では重要な足跡は何も残していない。彼が革命の理想をロマン主義的に熱っぽく説く文書が出回りはじめると、スイス当局の追求も厳しさをまし、1837年1月マッツィーニはロンドンに亡命する。

ロンドンに来て数年間はイタリア文学の評論に専心する。その年の11月にはトマス・カーライルと会い政治的見解を異にしつつも互いに相手を認めあっている。当時のイタリア人亡命者の間には穏健派（モデラーティ）と過激派（ラディカーリ）がいたが前者がやや多く、特にロンドンでは亡命者のほとんどが穏健派で、イギリスの例にならぬ立憲君主制の下でイタリア統一を目指すのが現実的によいと考えられていた（『イタリア民族革命』94ページ）。ガブリエーレも穏健派であったが、宗教的には反教皇主義でそれを公言もしていた。ただし、カトリックの信仰を捨てたわけではなく、イギリス国教会にも入らなかったし、イギリスに帰化もしなかった。マッツィーニはガブリエーレやその他の穏健派と見解を異にし、君主の裏切りに懲りて、共和制を目標として掲げていたわけである。マッツィーニにはロマン主義文学者にふさわしいエピソードがいくつかある。例えば、自分は借金で首が回らないのに現金が手に入るとすぐ乞食にやってしまったとか、彼の部屋にはカナリアが一羽ならずばたばたと飛び回っていると。カナリアを小さな籠に閉じ込める気にどうしても

なれなかったのだ。

1840年頃マッツィーニは政治活動に復帰する。一つには、1836年からイギリスで展開されていた普通選挙法を求める労働者の政治運動、チャーチスト運動を目の当たりにして刺激を受けたのと、もう一つには、ロンドンで眼にするイタリア人移民や出稼ぎ労働者の惨状をなんとかせねばと考えたのだった。1840年3月イタリア人労働者連合という組合をつくり、11月にはその機関紙『民衆伝道』を発刊する。翌41年11月には貧しいイタリア人亡命者の子弟に教育をさずけるための夜間および日曜の学校を開いた。この学校は48年まで開かれており、授業料は無料だったので、イタリア人やイギリス人教師のボランティアに運営を頼っていた。つまりイタリア人亡命者・移民の中には、ポリドーリやガブリエーレ・ロセッティ、アントニオ・パニッツィのように中産階級的な暮らしぶりをしていて、手回しオルガン弾き、石膏模型売り、モデル、ウェイター、日雇い職人などをしていて、前者が後者のための学校をつくったのである。ガブリエーレの自伝の付録には11通のマッツィーニからガブリエーレへの手紙が掲載されているが、そのうちの3通はこの学校に関するものである。手紙は1844年と1845年のものであるが、一通は、学校運営の収益をあげるためのコンサートのため一肌ぬいでくれという依頼、もう一通は学校の設立記念日にガブリエーレの美声を聞かせて欲しいという依頼である。ガブリエーレはこの学校設立の趣旨にももちろん賛成したのであるが、42年頃から健康がすぐれずあまり積極的な役割を果たすことはなかった。

1848年は革命の年である。2月にフランスで二月革命が起こると、それが導火線となって、ウィーン、ベルリンで三月革命が発生。ハンガリー、ボヘミアにも独立運動が起こる。イタリアでもミラノ、ヴェネチアで革命の報をうけその地を治めていたオーストリアに対する反乱が起こる。それに応じてイタリア各地から義勇兵が続々と北上する。3月25日サルデーニャ王カルロ・アルベルトも自ら4万5千の兵を率いてロンバルディアへ出陣する。マッツィーニはこれより先、二月革命後パリに行って「イタリア国民協会」を組織していたが、イタリア人の決起を聞き、4月市民の蜂起で解放されたミラノに入り市民の大歓迎を受けた。翌年2月ローマ共和国が成立し、マッツィーニは三頭政治の一人に選ばれ、7月に共和国が崩壊してしまうまでの短期間ではあったが指導にあたった。48年の革命はおしなべて反動勢力の勝利におわってしまうが、それは本稿の扱うところではない。

この年1848年はラファエロ前派が結成された年でもある。興味の中心はガブリエーレからゲイブリエルへ、クリスティーナへ移らざるを得まい。しかし、二人については稿を改めて論じたい。ガブリエーレは54年に死ぬのだが、50年代にはイタリア統一の見通しは暗かった。ガブリエーレは前述のように立憲君主制を望んでいたので、48年、49年の革命・統一運動の失敗に冷淡であり、マッツィーニに及び彼の信奉者たちとは50年頃から急速に疎遠になっていく。にもかかわらず、彼は常に希望を失わなかったことを付け加えて置く。

ガブリエーレが病気になってからはロセッティ家の生計は、ガブリエーレの妻の働きに拠るようになる。彼女は余所で教えたり、学校を開いたりする。ウィリアムによれば1850年の彼の兄弟姉妹の状況は次の通り (*Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography*, p. 108)。長女マライアは23

歳、イタリア語、フランス語などの教師。ダンテ・ゲイブリエル、22歳、画家で売り出そうと画策中、クリスティーナ、20歳、母の学校を手伝うが、他に定職は無し。ウィリアム、19歳、内国取引税務署の所員であり、『スペクテイター』誌の美術評論家であった。母の開いた学校は結局たいして成功しなかつたので、ウィリアムの稼ぎに一家はしばらく頼っていくことになる。

SELECTED BIBLIOGRAPHY

I. ガブリエーレ・ロセッティの生涯に関するもの

Rossetti, Gabriele. *Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography* translated and supplemented by William Michael Rossetti. Sands and Co, 1901. ガブリエーレがイタリア語の韻文で綴った自伝を息子のウィリアムが英訳して、註をくわしくつけたもの。付録としてガブリエーレが出した手紙や、受け取った手紙の英訳がある。

Rossetti, William Michael ed. *Dante Gabriel Rossetti His Family-Letters with a Memoir by William Michael Rossetti* 2 vols. Reprinted from the edition of 1895, AMS press, 1970. 第一巻は、ウィリアムによる400ページ以上にわたる回想録で、第二章を両親の記述にあてている。第二巻は、ダンテ・ゲイブリエル・ロセッティの家族・親戚あての書簡集。

Rossetti, William Michael. *Some Reminiscences of William Michael Rossetti* 2 vols. Reprinted from the edition of 1906, AMS press, 1970. 上記の回想録と重なるところも多いのだが、こちらにしか書いてない情報もある。

Rossetti, Gabriele. *Coment Analitico Al "Purgatorio" di Dante Alighieri* Firenze: Olschki, 1967. ガブリエーレが『神曲』の「煉獄篇」に註釈をつけたもの。Giulio Bertoni による100ページにおよぶ序文がついている。

Doughty, Oswald. *A Victorian Romantic: Dante Gabriel Rossetti* Oxford U. P., 1960. D. G. ロセッティの定評ある伝記。

II. イタリア史に関するもの

ここで紹介するのは、僕の手に見える初学者向けのものであり、さらに専門的なものはそれぞれの本の書誌を参照していただきたい。

Header, Harry. *Italy in the Age of the Risorgimento 1790-1870* Longman, 1983. 最初は地域別に歴史を記述し、リソルジメントにはいるとイタリア全体をまとめて書くという方法をとっている。政治・経済に関わる背景もさることながら、個人のエピソードを豊富に紹介しており、大変いきいきとして、しかも読みやすい。

森田鉄郎・重岡保郎著『イタリア現代史』山川出版社、1977年。写真や地図が豊富で、記述もわかりやすい。上記のロングマンの本がイギリスよりの視点をとりがちなのに対し、あくまでイタリア中心に書かれている。

森田鉄郎著『イタリア民族革命』近藤出版社、1976年。リソルジメントに的を絞った本。そのぶん

マッツィーニやガリバルディの話は詳しい。

G. プロカッチ著 豊下楯彦訳『イタリア人民の歴史Ⅱ』未来社，1984年。イタリアの通史の教科書の本。理論的分析も手堅い。

J. ゴデンヨ著 平山栄一訳『反革命理——論と行動 1789—1804』みすず書房，1986年。各国における革命と反革命の衝突について。時代は限られているが，その分情報量は多い。

An Essay on Gabriele Rossetti

Masahiro Tsuji

Gabriele Rossetti is the father of Dante Gabriel Rossetti and Christina Rossetti. He was a political refugee from the Kingdom of Naples. In this article I will describe the Napoleonic era of Naples and then the life of Gabriele Rossetti based on *Gabriele Rossetti: A Versified Autobiography* in order to explain why Gabriele had to leave his own country. In the process of doing so I hope to account for the family background of Dante Gabriel and Christina Rossetti, especially their Italian lineage.

The first section deals with the historical facts which happened in the Kingdom of Naples after the outbreak of the French Revolution, and an explanation of the personal events of Gabriele Rossetti in their historical context. In the Napoleonic era, Naples, which had been ruled by the Bourbons, was ruled by a brother and a brother-in-law of Napoleon who introduced into Naples a modernization of political and economical systems. When the Napoleonic era ended the exiled king, Ferdinand, returned from Sicily and in 1820 a bloodless revolution occurred which compelled the king to grant a constitution. Gabriele, as a poet, expressed the delight of liberty in his verse. A year later, however, Ferdinand abolished the constitution and Gabriele was obliged to leave his own country because he was regarded as 'the poet of the revolution'. First he fled to Malta with the help of a commander in the British Navy. There he made friends with John Hookham Frere, and two and a half years later, he went to London, where he met the Polidoris. In 1826, he married the second daughter of the Polidoris, who was seventeen years younger than he. Their marriage, which produced four children in four successive years, was happy, although they were not rich. He wrote books on Dante which were famous for the assumption that many illustrious writers as well as Dante belonged to the Freemasons and had anti-papal thoughts. In 1831 he was appointed Professor of Italian in King's College, London. His health began to decline towards 1842, and he suddenly lost sight in one eye through amaurosis. He died on 26 April 1854 and lies buried in Highgate Cemetery.